

小学校教育実習事前事後指導の実践報告

— 教育実習に向けての指導の手順と学生の反応 —

相原貴史*

**The practical report of the guidance after the thing in front of
the small school education training thing :**

**The process of the guidance toward the student
teaching and a student's response**

Takashi AIHARA *

(要旨)

本稿では、相模女子大学子ども教育学科における「小学校教育実習事前事後指導」の内容と、その学びを通しての学生の反応について報告する。

始めに「教育実習までの準備についての指導」として(1)教育実習に向けての意識を高める指導と(2)教育実習までに学ぶべきことの指導について記す。次に「教育実習の現場での心構えの指導」として(1)子どもへの対応と(2)実習の態度の指導について記す。そして、教育実習全体を見通すことができるように「教育実習中の1日を見通させる指導」と「教育実習期間の学びのポイントの指導」を行う。その上で、子どもとの活動を勧める上での留意点として「授業参観・教壇実習についての指導」と「問題発生への対応の指導」を行う。さらに、子どもとの活動の核である授業の構築について「授業の組み立てと子どもへの対応の指導」を(1)授業のデザインについて理解を深める面と(2)授業を見る目を育む面からの指導を行う。最後に、その指導を元に模擬授業を行った学生の反応と実習を通した学生の反応を示し、この「事前事後指導」がどのように学生に浸透しているかについて記す。

キーワード：心構え 対応 「見る」と「見える」 授業デザイン

1. はじめに

小学校に於ける、教育実習に向かう学生に対して行う指導として重要視されるのは、教育実習が小学生の貴重な学びの時間を頂いて行わせていただくものだという認識を持たせることである。

将来教職に就いた時に、自分を先生と呼んでくれる子どもたちに、意義ある生活の場と有効な学びの場を与えられるようになるために、実習先の子どもたちや先生方の力を借りて、自らの教師力を高めさせていただく場なのである。宛てがい扶持の時間をただ過ごしてくればいいのではない。

そのために、小学校において、子どものためにどのような仕事をどのような配慮をしながら行えばいいのか、子どもたちに相対した時にどのような場合にどう対応したらいいのかを見いだせるようになることを目指さなければならない。

相模女子大学子ども教育学科における「小学校教育実習事前事後指導」では、そのためにどのような指導を行っているかを以下に報告するとともに、学生がそこでどのような学びを行っているかについて記す。

2. 教育実習までの準備についての指導

(1)教育実習に向けての意識を高める指導

①教育実習の心得・心構えを確認する

○教師への道の第一歩として、何を学び、何をを行うかを明確に自覚させる。

- ・実践的指導力を身に付けること。
- ・教師に向け自己の人間力を磨き高めること。
- ・人間的な魅力を醸成すること。

○教師（社会人）としての自覚を持つ。

- ・教育者としての日々の勤務態度を身に付ける。
 - *言葉遣い・服装、態度
 - *挨拶 *熱意、愛情
 - *笑顔・明るさ、元気
- ・子どもとかかわる力を高める。
 - *積極的にコミュニケーションの機会を持つ。

○健康管理

- ・持病などがある場合は医師に相談し報告する。
- ・虫歯等実習の妨げになるものは治療しておく。
- ・日常に運動を取り入れ体力をつける。
- ・生活リズムを整える。

②教育実習での学びの視点を明らかにする

○身に付けるべき指導技術

- ・学習指導案の作成方法
(略案、教壇実習用指導案の作成)
- ・教材研究、教材作成、授業の構成、板書計画
- ・発問・応答、子どもの考えの引き出し方
- ・意見の取り上げ方、話し合いへの導き方 等
- ・日常の指導(朝、休み時間、給食時、清掃時)
トラブルの解決、励まし方、しかり方
- ・障がいがある子どもへの指導方法
- ・家庭との連携の仕方
学級通信の発行、保護者会の運営、授業参観の進め方

(2)教育実習までに学ぶべきことの指導

①実習校でのオリエンテーションで学ぶこと

○担当学級について

- ・児童の実態
人数、男女比、児童の傾向
配慮児童の有無と配慮の内容
- ・学級経営の方針
担任の先生が大切にされていること
担任の先生が気をつけられていること
- ・学級の決まりや経験
子どもと決めたルール
学級としての経験(みんなでやり遂げたこと等)

○小学校について

- ・出勤時に行くこと
出勤簿の押印から着替えまで
教室整備、清掃等子どもを迎えるまで
- ・1日の流れ
時程、休み時間や清掃時間の留意点
下校指導やその後の時間の使い方

○実習期間中のことについて

- ・教壇実習の見通し
教科や時数(実習生としての希望)
研究授業の教科、単元
お借りできる教科書、資料等はあるか

○学校行事等特別な活動

○実習中の服装、持ち物

- 準備すべき事物を確認し整える
実習中の服装、靴、事務用品、給食時用のナプキン、コップ、歯ブラシ等の用意

②教育実習までに自ら学ぶべきこと

- 担当学年の学習指導要領解説(全科)を熟読する
- 担当学年に至るまでの子どもの学習経験を調べる
- 担当学年の身体的心情的発達の特徴を調べる
- 研究授業の単元の教材研究

③教育実習までに考えておくこと

- どんな教師を目指すのか
- 教師についての観察のポイント
授業の組み立て方
子どもへの発話や応答の工夫
子どもの見方や対応 etc
- 子どもについての観察のポイント
子どもの行動や反応の実態(発達段階)
子どもの経験や知識
子どもの考え方や理解の仕方 etc

④教育実習の日誌や指導案の書き方

- 実習日誌の書き方
日々の観点(重点)を決めるポイント
日々の観点到に沿った振り返り方
・学び・気づきから見直し・改善案、実行へ
・誤字・脱字をチェックする
・期限を守って提出する
- 学習指導案の作成の仕方
模擬授業を通して
・教科等の指導について
何をどう身に付けさせるのか
・授業観察について
何を見るのか観点を決める

3. 教育実習の現場での心構えの指導

(1)子どもへの対応

- ①若さに子どもはとびつくので、明るく、はきはき、てきぱきした態度が求められる。
- ②教育実習生も先生という意識をもつことが大切。友達ではない。
- ③大きな声でゆっくりはっきりした口調で話す
- ④どの子どもにも平等に接することが原則。子どもの目を意識すること。
- ⑤子どもを知ることは教育の原点。自由時間などを活用して、よく話し、よく遊ぶこと。
- ⑥子どもの喧嘩や争いには双方の意見をよく聞くこと。ケガの未然防止に努めることが必用。

- ⑦子どもがケガ・病気の時は早急に担任、管理職、養護教諭に連絡する。
- ⑧子どもを教室や廊下に立たせるペナルティはいけない。子どもの学習の権利を奪う。
- ⑨体罰は禁止。叱るときはしっかり叱り、その後、その理由を話すフォローが大事。
- ⑩トラブル等は担任・管理職への報告、連絡、相談(ほうれんそう)が必要。
- ⑪保護者等の子どもの引き取りに際しては、引き取らせる前に必ず担任へ連絡する。
- ⑫自分の住所・携帯番号などは子どもに教えるはいけない。校外で会う活動も厳禁。

(2)実習の態度

- ①言葉づかいは正しく・丁寧に心をかける。子どもには親しみを持って接し、高圧的になったり遠慮しすぎた言い方にならないように注意
- ②普段の服装は端正で落ち着いたものにする(派手なもの華美なものジーパンは禁止)
- ③ジャージは汚れる可能性のある時のみ着用
- ④化粧、髪型、マニキュアなども服装に準じ常識の範囲にとどめる。アクセサリは禁止。
- ⑤上履きは運動靴を使用。サンダルは使用禁止。
- ⑥学校備品(パソコン、視聴覚放送機器、ピアノ、体育用具、印刷機、コピー機、各用紙等)の使用は担当の職員の許可を得て使う。
- ⑦疑問やわからないことは担当の教師等に相談し、自己判断しない。
- ⑧養護教諭、事務職、技術員とも積極的に話す。
- ⑨バイク・自動車通勤は禁止、校区内は禁煙。
- ⑩子どもの氏名はもちろん、担当校で知り得た情報全ては外部に漏らしてはいけない。
校外での友達等との会話やメールなどの話題に挙げてはいけない。
また、実習日誌の記入も外部の人の目に入る自宅以外の場で行ってはいけない。

(3)その他

- ①子どもの作品(絵・習字・工作・作文等)をよく観察すること。
- ②校長が在校中は、すすんで挨拶、会話し、助言を受けるようにする。
- ③学校の全体的な動きや活動も見るようにする。

4. 教育実習中の1日を見通させる指導

(1) 登校後

- ①始業時刻より少なくとも30分は余裕をもって出勤する。
- ②職員室で朝の挨拶をして出勤簿に印を押す。
- ③体調不良等の都合で欠席する場合、事前にわかれば前日に、突然の時はできるだけ早く、校長(副校長)・担任、大学教務課に連絡し、後日欠席届を提出する。
- ④始業前、担任や校長(副校長)等の許可があれば教室に行って環境整備をしたり、子どもたちに会って児童理解を深めたりする。

(2) 授業前

- ①担任教師と打ち合わせをする。今日の課題について指導教員からも指導をうける。
- ②朝会や集会時には子どもの引率や補助をする。
- ③クラスで担任教師とともに子どもの健康を観察する。
- ④特別教室(理科室、図書室、音楽室)、体育館等への移動時は付き添う。
- ⑤子どもへ学習準備・整理・整頓の指導を行う。

(3) 授業中

- ①子どもの課題の把握状態や進行状況を見取る。
- ②子どもの私語・立ち歩きなどについて注意をする。
- ③課題の解決に難航する子どもや質問してくる子どもに、すぐ答えを教えるのではなく、考える手だてを示して支援する。
- ④周りの子どもの学習に迷惑をかける子どもには厳しく指導する。
- ⑤授業中の子どもの健康観察を行う。
- ⑥危険な道具(カッター等)の使用等安全管理の指導を徹底する。

(4) 休み時間

- ①休み時間は、指導教員からの指導を受けたり、子どもを知る時間とする。
- ②特別教室、体育館などは担当教師に訊いてから使用する。
- ③時間配分を考え、自分でも休憩の時間をとる。
- ④職員室でお茶を飲むことも必要である。(教師の情報交換などを観察する)

(5) 給食時間

- ①マスク、白衣を着て引率や配膳の補助をする。
- ②熱い汁物の運搬・配膳には、特に注意をはらい補助・指導をする。
- ③自分でも給食は好き嫌いせず残さず食べる。
- ④異物の混入があったら一時食事を止める。
 - ・担任との連絡、管理職への迅速な連絡、発見した混入物を保管する。
- ⑤食事の後かたづけ指導、給食室までの返却指導に付き添いする。
- ⑥楽しい給食時間になるよう配慮する。

(6) 清掃

- ①担任、担当教師とともに清掃指導をする(教室の窓開け、清掃の仕方、ゴミ捨て等)。
- ②特別教室(図書室・音楽室・図工室等)の清掃指導をする。
- ③清掃時の反省会をする。
- ④清掃用具等の後かたづけ、ゴミ箱のゴミ捨て・ゴミの分別の指導をする。
- ⑤清掃後の手洗い、うがいの指導をする。

(7) 放課後(帰りの挨拶後)

- ①戸締まり、カーテン開け、冷暖房器具の停止、机上整理、ロッカーの整理後、下校させる。
- ②子どもだけを教室に残さない。
- ③自分が最後に教室を離れるときは教室・廊下の窓を閉め、冷暖房器具の停止や消灯の確認をする。
- ④教室の安全管理を行う。
- ⑤教室の整理・整頓に注意する。

(8) 放課後(子ども下校後)

- ①指導教員との話し合い、指導を受ける時間を相談のうえ設ける。
- ②時間を有効に使って、指導教員からの指導を元に、自らの課題について記録したりする。
- ③特に、担任とは連絡を密にとり、今日中に行うこと、明日までに準備することなど、担当クラスのためにすべきことを先に行った後に自分のすべきことを行う。
- ④体調不良等の都合で早退する場合、事前にわかれば前日迄に、突然の時はできるだけ早く、校長(副校長)・担任、大学の教務課に連絡し、了承を得た後早退届を提出して退出する。

- ⑤教育実習期間中は教育実習に専念し、それ以外の用事（アルバイト等）を行わない。
- ⑥教育実習日誌は、毎日記録し、担任に提出する。

5. 教育実習期間の学びのポイントの指導

第1週

- ①担当学級の子どもと遊びながら親しくなり、子どもを理解していく。
- ②担当組の各授業を参観し、その授業のねらいをしっかりとつかむ。
- ③学校の施設、組織、教育計画の概要を理解する
- ④教師の使命、服装、勤務について認識を深める
- ⑤学級子どもの実態を押さえ、学級経営に少しずつ参加する。
子どもに積極的に声を掛け、名前と性格を掴む
- ⑥学校行事に参加し、特別活動の在り方を知る。
- ⑦講話を通して、小学校教育について学ぶ。
☆昼食は原則担当クラスでとる。
☆昼休みと朝は、できるだけ外で子どもと遊ぶ。
☆子どもや教員へ大きな声で挨拶をし、気の利いた行動を心がける。

第2週

- ①学級の子どもの個性、能力の理解に努め、人間関係を深める。
 - ・元気がない子どもに気を遣い、その子どもの性格を鑑み、実態を理解する。
 - ・子どもの仲間関係（いじめや仲間はずれ等）を、言動やかかわり方から観察する。
- ②各学年の授業を参観し、低学年、中学年、高学年の発達段階や各教科の学習内容をつかむ。
 - ・教壇実習をにらんで参観し、指導内容・指導方法等の研究をする。
- ③教壇実習（教科）の準備をする。
 - ・今の学習の続きのどの部分を行うか見通しを持つ。
 - ・過去の指導案を見て、アウトラインを考える。
- ④クラブ活動に参加し特別活動の在り方を知る
☆精神的肉体的に疲れが出る頃であるので無理は禁物！

第3週

- ①学級子どもの個性、能力の理解に努め、子どもとの人間関係を一層深める。
 - ・子どもに積極的に話しかけ、相談や悩みに応じて上げる。味方になってあげる。
- ②教壇実習の練習として、取り組み易い教科の実地授業を行う。（時間数は相談）
- ③研究授業に向けて、教科の指導案を作成し、全ての指導教員に配布する。
 - ・指導案配布は、前日の放課後までに行う。
- ④研究授業を行い放課後に授業の反省会を行う。
 - ・参観教員からも指導を受ける。
- ☆2回目の研究授業が行える場合は、その準備をする。（担当教員に相談）

第4週

- ①学級の子どもの個々に目を向け、多面的に子どもの理解を深める。
- ②専科の教壇実習も行う。
 - ・事前に担当専科教員と相談する。
- ③全日実習に向けて指導案を作成する。
- ④2回目の研究授業を行った場合は、再度反省会を行い、参観教員の指導を受け、今後の授業実践に生かす。
- ⑤実習の総まとめをする。
 - ・やり残した事はないか。
 - ・実習で学びたかった事や見たかった事や知りたかった事を進んで学ぶ。
- ⑥実習担当学級の子どもや教職員にお礼の言葉を考えておく。
☆教育実習の総仕上げとして、担任を任されても実行できるように、指導力を身に付ける。
☆最終日には、担当クラス及び指導担当者に挨拶とお礼の言葉を誠意をもって述べる。

6. 授業参観・教壇実習についての指導

(1)授業参観について

- ①教師の指導の仕方、言動を具体的に捉える。
 - ・授業の組み立て（導入・展開・まとめ）を捉える
 - ・子どもへの発話・応答（興味を引く・考えたくなる・発表したくなる）の言葉を捉える。
 - ・個々の子どもをどう理解し、どのように対応しているかを捉える。
- ②子どもの学習中の言動や反応を具体的に捉える
 - ・教師の発話・応答にどう反応しているかを捉える。

- ・子どもはどのような経験や知識を持ち、学習活動にどう反映しているかを捉える。
- ・子どもはどのような考え方や理解の仕方をするのかを捉える。

☆観察に当たっては、多角的な視野を持ち、その日の課題について研究的、実証的な態度で記録をとり、授業後に指導教員にその捉え方について指導を受けることが重要な研修である。

☆原則として配属学級で行われる授業は、全て観察（参観）する。また、授業参観に当たっては、開始時刻に遅れないようにする。特に、特別教室で行われる授業について注意する。

(2) 教壇実習について

- ①教壇実習の実施に当たっては、事前に担当教員の指導を受け、教材研究を行い学習指導案を作成して提出し、助言・指導を受けた後指導に当たる。
- ②教壇実習後は、指導教員と研究的な話し合いをもち、授業に関して十分に研究を深める。
- ③授業に際して必要な教材・教具をできるだけ工夫をする。
(校内の備品、教材教具を使用するときは、担当教員の指示を受け、正しく使用する)
- ④指導教員の助言のもとに、相互に協力して成績物・調査物等の結果処理に責任をもってあたる。
- ⑤研究授業は、教材研究をしっかりと行い学習指導案を作成し、授業準備を十分にした上で実施する。

(3) 教育実習日誌への記録の仕方について

- ①毎日、その日の課題を決めて実習にあたる。
- ②その時間に参観や実習した教科や内容について、その題目と主な内容を記す。
- ③①の課題についてその日1日で見いだすことができた事実を、ある時間もしくは1日の流れの中での変化に焦点を当てて記し、考察を加える。
- ④授業外の活動（朝の時間や休み時間、放課後等）で見取った事実を記し、考察を加える。
- ⑤参観もしくは実習した題目と、その時間の自らの課題を記す。
- ⑥その授業の目的と主な内容を記す。

- ⑦左側には授業の流れに沿って教師の具体的な指導の言動、それに対する子どもの反応の言動を記す。特に注目した場面についてはできるだけ詳しく記す。

右側は、左側に記した事実から見いだしたこと、考えたこと、提案、新たな課題等を記す。

- ⑧指導教員に記入押印をいただく。

☆教育実習日誌は、毎日記録し、指導教員に提出する。

7. 問題発生への対応の指導

(1) 日頃のコミュニケーション「ほう・れん・そう」を大事にする。

- ①「ほう・れん・そう」でトラブルを防ぐ。

「ほう」子どもや小学校に何か問題が生じた場合には、担任・校長（小学校）や教務課（大学）に必ず報告する。

「れん」病気で具合が悪くなったり電車の事故で遅れたりするなど自分に何かあったときは、すぐに小学校・担任・校長（小学校）や教務課（大学）に必ず連絡する。

「そう」子どもに相談を頼まれたり何かしたいと思ったりしたときなどは、自分で判断して行動する前に、何事も担任や担当教員に必ず相談することが大切。

- ②「あ・い・さ・つ」も大切にする。

「あ」は明るく、「い」はいきいきと、「さ」はさわやかに、「つ」はつつましく。

- ③意欲的なかわりが求められる。

自分から進んで子どもや教員たちとかかわったり、分からないことを尋ねたりするという積極性や自発性も教育実習生に求められている。意欲的なチャレンジがかかわりの秘訣。人としてのつきあい方のマナーを守ること、丁寧な言葉遣い、学ぶという謙虚な姿勢が基本となる。

(2) 子どもがケガをしたり、体調が悪くなった場合

子どもがケガをしたときは、すぐに担任に報告する。体調が悪そうな子どもに気づいた場合も同様。その子や周囲が動揺しないように落ち着いて対応する。また、実習の前にケガに対する対処方法について学習しておくことも重要。

(3)出勤前に自分の体調が悪い場合

無理はしないようにする。しかし、無断欠席は厳禁。「1日の流れの中での注意事項」に記したように、体調不良等の都合で欠席の場合、事前にわかれば前日に、突然の時はできるだけ早く、校長(副校長)・担任、大学の教務課に連絡する。体調回復後、担任・校長、大学の教務課と事後の打ち合わせをする。

体調以外のやむを得ない事情で遅刻・欠席をする場合も、同様に連絡する。

(4)小学校で実習中に気分が悪くなった場合

遠慮をしないで、近くの先生や職員に体調が悪いことを伝える。無理をすると、かえって子どもや他の先生に迷惑がかかるので注意する。

8. 授業の組み立てと子どもへの対応の指導

(1)授業のデザインについて理解を深める

授業は「人間的なもの」であるがゆえに「あいまいなもの複雑なもの」である。その性質が「子どもと教師の「発見」や「想像」の源泉である」(藤岡完治 1998)とされる。子どもと教師両方で学習経験を積み、経験の変容を自覚させ、「知」の創出を図るのが「授業デザイン」である。

「小学校教育実習事前事後指導」においては、子どもとともに学びを創る教師としての自覚を持つとともに、子どもを「主体的・対話的で深い学び」に導くために、どのように授業をデザインすることが望ましいのかを体得するために、特別の教科となった道徳のミニティーチング(模擬授業)を行うこととする。

ミニティーチングは15～20分程度の時間で行うため、特に導入の仕方を大切に扱う。導入では、題材についてのレディネスを高めるとともに課題に対する意欲関心を高めることで、子どもたちから自らの経験を元にした課題解決に向けての多様な考えを引き出す場を生み出すことが求められる。

そのために、対象学年にどのような学びの場を与えたいのかを、これまでの子どもを観察した経験から考えるとともに、そのための題材を選び、1単位時間の学習指導案(略案)を作成し、そのうちの15～20分分のミニティーチングを行うことを通し、自らの児童観、教育観、指導観を表現できるように努める。

(2)授業を見る目を育む

ミニティーチングを通して、互いの児童観、教育観、指導観を学ぶとともに、その授業が、子どもの学びを成就させるために適当であったか、授業者の目的を達成するために適当であったかという二面から、授業後の話し合いで検討できるように、以下の観点の中から自らの視点を決め、授業者とともにその授業についてのリフレクションを行うことができるようにする。

「授業を見る観点」

○指導案について

- ・目標が児童に適し明確
- ・「導入」「展開」「まとめ」の構成
- ・学習課題や活動、内容が明確
- ・指導上の留意点・評価が的確

○授業の組み立てについて

- ・学習意欲の湧く導入の工夫
- ・学習課題の明確な提示
- ・児童の学びや活動を高める授業展開(大事な言葉・良い意見の取り上げ・個々の意見の全体への広げ)
- ・意欲を引き出す教材・教具の工夫(ワークシート・掲示物・紙板書)
- ・意図的な板書計画(見やすい・理解しやすい・文字の大きさ・書き順)
- ・発問の工夫(一問一答にならない)

○指導態度について

- ・言葉づかいや声量が適切(スピード・音量・メリハリ・間の取り方)
- ・表情豊かな授業展開(明るい態度・身体表現・笑顔・姿勢)

9. 事前事後指導と実習を通じた学生の反応

(1)模擬授業を通じた学生の反応と変容

視点1「指導案」についてのコメント

5月25日

- 1)約束を守るという態度を育てる学習として、流れがとても良いと思った。

6月22日

- 1)「相手の立場に立って」という目標に合わせて主人公の気持ちを見ていて、客観的に見るという意味では適していると思った。
- 2)主人公の仕事内容を確認する活動では、発問の言葉をかなり慎重に選ばないと予想しているような反応は出にくいと感じる。

6月29日

- 1) 支援で「～に共感できるようにする」というものが多いが、皆が共感とはならない。

学習指導案の見方として、当初は「流れがとても良い」というような大雑把な見方でその書きぶりを捉えていることが分かる。指導案が教材の書かれている順序に従って、それを理解するというという進み方で示されていれば、学生にとっては理解しやすいのだと考えられる。つまり、この時点では学生が「教材を教える」というスタンスにいと捉えられるのである。

模擬授業の回数を重ねていくと、その視点は「目標に合わせて主人公の気持ちを見て」いるかどうかというように、指導目標と活動の進め方が一致しているかという視点が生まれてきている。また、発問と予想される反応の対応に目を向け、「慎重に選ばないと予想しているような反応は出にくい」と示しているように、児童にとって発問がどのように捉えどう反応するかを考えるなど、指導案上でも学習活動の意義を検討することができ始めていることが分かる。

そして、支援という名の下に共感を強いることがないようにしなければならないという考え方を持つようになり、「教材を教える」という考えから脱却し始めたとも捉えられるのである。

視点2「授業」についてのコメント

5月25日

- 1) 子どもの発言に「そっか、〇〇なんだね」等と返して子どもも嬉しいだろうと感じた。
- 2) 板書の字の書き順が違っていた。
- 3) 三つの約束はそれぞれの意味が異なっているので、まとめて「なぜ」と問うのではなくて、一つひとつに対して聞くのがよいと感じた。

6月22日

- 1) お祖母さんの絵と教師の動作があったので、自分ならどうするかを考え易かった。
- 2) 発問がアバウト（ゴミ収集の仕事ってどんな仕事？）だと、子どもが迷走してしまう。

6月29日

- 1) 唐突に大切にしているものと聞かれると不自然な感じがする。問いかけの工夫がいる。
- 2) 子どもの発言に言葉を返してあげていて良かったが、板書しながらだと聞き取れない。

学習指導の見方としては、当初は教師のことばかけや板書の文字など目に映るものを「見る」に留まっていると見ることができる。

発問についても、自分が問われて考え易かったかどうかについてのコメントが記されていた。

模擬授業を重ねた段階では、教具の準備や教師のパフォーマンスが、発問についての考えを進めるのにどのように効果があったかという視点を持つようになってきたことが分かる。

また、ちょっとした発問のニュアンスの違いやことばの選び方が、児童を「迷走」させていたのではないかと記していることから、児童を学習のめあてに沿って導き、考えを深めさせていくのに有効であるかどうかについても検討する見方ができるようになってきたと捉えられる。

つまり、授業を表面的に「見る」のではなく、教師の働きかけが児童にどう機能するのが、児童の立場から少しずつ「見える」ようになってきたと捉えていいのではないかと考えられる。

教師の発問の重要性を理解したことから、そこで用いることばの吟味に目を向けるとともに、児童がそれをどのような心情で捉えるかにも目を向けることが、児童を主体的・対話的で深い学びに導くために大切であることに気付き始めたと言えるのである。

視点3「指導態度」についてのコメント

5月25日

- 1) 常に笑顔で、ちょっとした仕草も入って、雰囲気がよいと思った。

6月22日

- 1) ハキハキとしていてテンポ感が良かった。

6月22日

- 1) 授業の雰囲気として落ち着いていて、話すスピードもちょうど良かった。

6月29日

- 1) 範読など一つひとつのことばをはっきりと、句読点とかは意識して読むと分かりやすい。

指導態度については、一貫して明るくはっきりとした指導態度を教師に求めていることが分かる。そのことが児童の学習態度を前向きにするだけでなく、学習内容の理解にも結びつくことに気付き始めたと捉えられる。

(2) 事後レポートに見られる学生の反応

○児童との関わり、児童の把握と理解

この実習期間は、児童と積極的に関わることを常に意識して生活した。児童一人ひとりの声に耳を傾けることや、児童の表情を観察し対応すること、その児童の良いことを褒め認めることなどを心掛けた。児童と関わっていく中で、「消極的な児童への積極的な関わり」が大切であるということを、指導教諭の先生から教えていただいた。(中略)

私自身もこれらの事を意識して、控えめな児童にも毎日話しかけるようにした。すると2週目に入ったあたりでその児童が少しずつ心を開いてくれた。さらに最終週になると、その児童から様々なことを話してくれるようになった。このことは本当に嬉しく、児童との積極的な関わり的重要性を、肌で実感することができた。

○児童の実態にあった授業と日々の教材研究

教壇実習を行い、発問の難しさや児童の計り知れない想像力を思い知らされた。ただワークシートに登場人物の会話をまとめるだけが、発問一つで児童は頭を抱えてしまう。たとえ教師にとっては簡単な活動であっても、児童にとっては難しくということを、身を以って感じた。

児童の実態やその時の状況によって、発問を変えたり、補助説明をしたりしていかなければならない。そのためにも、教養や知識を常に蓄えておかなければならないと痛感した。

児童の発言は、自分が予想していたものを遥かに超えていたり、面白い考えだったり、様々な発見だったりする。たとえその発言がずれていたり間違っていたりしたとしても、「間違っているよ。」と指摘するのではなく、その発言を認め、発言を活かしながら児童一人ひとりを伸ばしていけるような授業を心掛けなければならない。そのためにも、児童の実態を見取り、教材研究をすることが大切であると感じた。

○授業から信頼を得ること

15時間の教壇実習では、授業を視覚的にも捉えられるような教具を多く制作した。国語では登場人物のお面や拡大したワークシート、算数では数カードや計算ブロックを用い、児童に操作させるような活動を取り入れた授業を行っ

た。また発言や前に出て作業させる際、消極的な児童にもしっかり指名し、児童全員が授業に参加できるように配慮した。すると児童は食いついてくれ、積極的に授業を受けてくれたように感じた。そして、多くの児童が私の授業を楽しみにしてくれるようになった。

校長先生が初日の講話で、「授業から、信頼を得る。」とお話ししてくださった。授業内容に自信はないが、これが信頼を得ることかと感じた。日々の授業を振り返り、教材研究を積み重ねていくことが重要であることを実感した。たとえ教材研究で苦労したとしても、それは必ず自分の身に付き、自分への力となる。そしてその力は、必ず児童の力に結びついていくということを忘れてはならないと感じた。

この学生のレポートからも分かるように、教育実習が学生にとって大きな学びの場となっていることは明白である。

一人ひとりの児童を理解することが大切なことは、頭の中では理解している。しかし、それを実践的に行うにはどのような地道な努力が必要なのか、その成果はどのように現れるのかなどは、実践を通さなければ理解できないことである。生活の場面で、学習の場面での実践的な取り組みを通して学んでこそ、教師力が高まると言える。

実習を通してその貴重な学びを得ることができるよう、小学校教育実習事前事後指導でその芽を育まなければならない。小学校教育の現場で、また教育実習でどのようなことが行われているのかについての知識を身に付けさせるとともに、そこで学びを深めるために児童の実態や授業が「見える」目を持たせるようにする必要がある。

学生のレポートの内容などから、現時点では、この小学校教育実習事前事後指導が多少なりとも教師を目指す学生の力量形成に機能していると思われることができるが、今後さらに学生にとって有意義な授業となるように、指導内容の改善を図っていかねばならないと考える。

なお、上記の学生のコメントならびにレポートは、学生の理解を得て掲載したものである。